



▲水塚調査隊結団式

## 水塚調査隊発足

平成20年10月26日(日)、香取市十六島地区を対象とする水塚調査隊が発足しました。香取市内在住者を中心に茨城県や東京都から大利根分館に集まった20名は結団式のあと、さっそく現地調査に飛び出して行きました。

10月26日午前10時、県立中央博物館大利根分館に20名の隊員と中央博物館の学芸員3名が集合しました。

齋木勝副館長のあいさつの後、学芸員から調査の手順や方法について説明があり、また今年度は十六島地区のうちJR鹿島線から東側の磯山・加藤洲・扇島下ノ洲地区(2頁図)を対象とすることが伝えられました。

### 第1回 調査

隊員達はまず扇島下ノ洲地区のSOさん宅を訪れ、学芸員のサポートを受けながら屋敷地全体の略測や水塚の計測を行ったり、水塚上の倉の構造を調べました。また、家主人から水塚の謂れや昔の水害について聞き取りを行いました。SOさん宅



▲SOさん宅水塚の調査の状況

のりハーサル的な調査の後、3グループに別れそれぞれの分担地域の本格的な調査に取り掛かりました。家々を1軒ずつ回り、水塚の有無を確認しながら、水塚が発見されると家主さんの了解を得て、計測、聴き取り、写真撮影で記録を取りました。こうして1日目の調査はあっという間に時間が過ぎてしまいました。

# たかつほ通信

大利根 川のフィールドミュージアム ニュースレター

第1号

発行：千葉県立中央博物館  
大利根分館  
大利根 川のフィールド  
ミュージアム  
たかつほ通信/第1号  
連絡先：〒287-0816  
千葉県香取市佐原ハ4500  
Tel 0478-56-0101  
Fax 0478-56-1456  
<http://www.chiba-muse.or.jp/OTONE/>  
2009年3月31日発行

CHIBA



▲「十六島地区」の位置

この日の成果は、倉を持つ水塚2基の記録と計測、倉を持つ水塚2基の発見、倉を持たない水塚2基の記録と計測を行うというもので、思いもよらない大きな成果があげられました。天候にも恵まれ、短い時間でしたが隊員の皆さんは調査の手順にも慣れ、手ごたえを感じているようでした。ありがたかったのは、地元の皆さんが大変協力的であったことです。倉の中にも快く入らせていただき、OGさんのお宅では明治40年の水害を記録した文書をわざわざ出してきていただきました。

これからの長い調査に希望を持って進んでゆけると全隊員が思ったことでしょう。



第2回 調査

調査は、11月30日(日)に行われました。参加者は13名と前回より少なかったものの、香取市の文化財を所管する地元教育委員会生涯学習課の職員の方にも参加いただきました。午前9時30分、大利根分館に集合した後、前回と同じく3グループに分かれ、現地へ出発しました。

各隊員は2回目とあって、計測をする人、それを記録する人、家主さんから聴き取りをする人など、自然と役割分担ができてきました。昼食で一旦大利根分館に戻りましたが、隊員の皆さんは夕刻まで調査に没頭しました。



▲ODさん水塚

この日の成果は、倉を持つ水塚の記録・計測3基、同水塚の発見2基、同水塚の消滅確認5基のほか、倉を取り壊し塚のみが残るものが5基、塚上の倉を改築して住居としたもの1基を記録しました。このように、2回目の調査も前回以上の成果がありました。

第3回 室内まとめ作業

第3回は12月21日(日) 10時に集合し、佐久間豊館長のあいさつと川のフィールドミュージアムの趣旨について話がありました。その後、2回の調査成果をグループごとに調査票にまとめ、午後から各グループの成果の発表を行いました。



▲成果まとめ作業

香取市十六島地区(JR鹿島線から東側の磯山・加藤洲・扇島下ノ洲地区)の水塚調査の初年度の成果はまとめると次のようになりました。

①「水塚」を水塚と呼んでいない。  
どの家でも水塚という言葉を知らず、ただ「クラ」と呼んでいる。

②揚舟は、存在しない。  
かつては水郷地帯であり、「さっば舟」を日常的に使用していたため、当然のことと言える。

③典型的水塚がかつて多くあった。  
昭和39年に始まった土地改良により水路が道路に変わった。自動車が普及して水塚は取り壊され、多くは駐車場となった。

④塚上の建物は2階建ての倉のほか、平屋で住居を兼用したものがある。ただし、改築の可能性もある。

⑤隣接集落で水塚の性格が異なる。

磯山の西半地区は倉付きの水塚はなく、2軒の家に塚のみが造られたと思われ、代わって洪水時の舟なぎの大樹と氏神が祀られた小型の塚がほとんどの家にある。この施設については、今後さらにその性格を検討する必要がある。

来年度はこれらの成果と問題点を踏まえて継続調査を進める予定です。



▲平成20年度調査水塚分布図(暫定)

縮尺1:10,000



## 水塚の測量調査

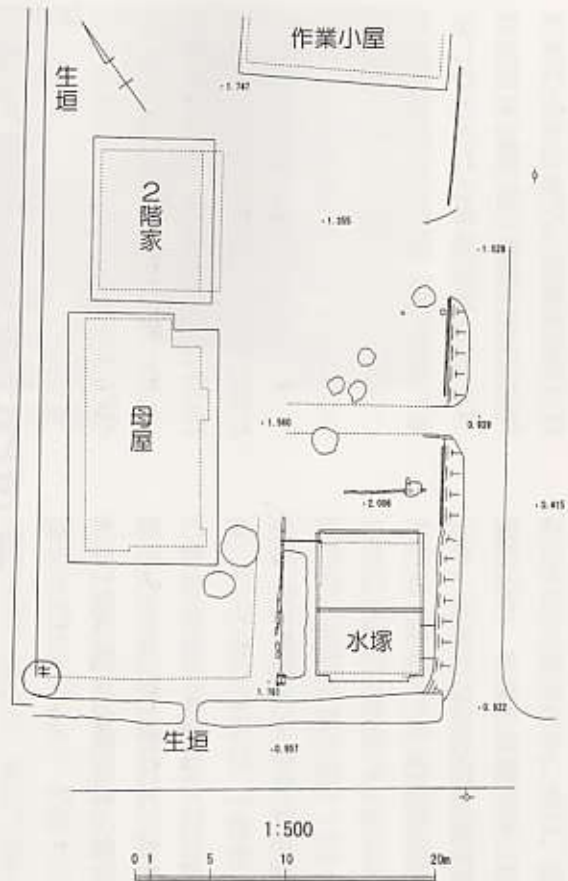
2月25日(水)、測量業者により磯山地区OGさん宅の測量調査を行いました。左側の図がその成果です。

上段が母屋と水塚の位置関係を示す屋敷地の平面図、中段が水塚の側面図、下段が水塚の正面図です。

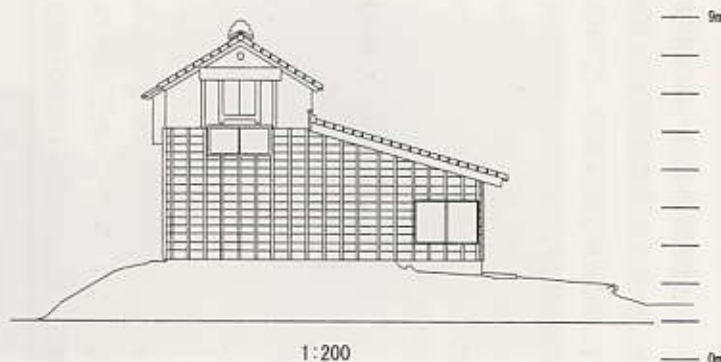
屋敷地の平面図を見ると水塚は南東隅に配置されています。これはこの地区に共通する特徴です。南西隅には大樹が植えられた小さな塚があり、そこに氏神様が祀られています。

水塚は標高約2mの高さがあります。屋敷地に入る小路はもとは水路(エンマ)で、水田面の標高は現在0.4mありますが、土地改良によって乾田化したため、もとの海拔はほぼ0mであったと思われます。したがって、以前は約2mの高さの土盛りであり、現在よりもかなり高い印象であったでしょう。

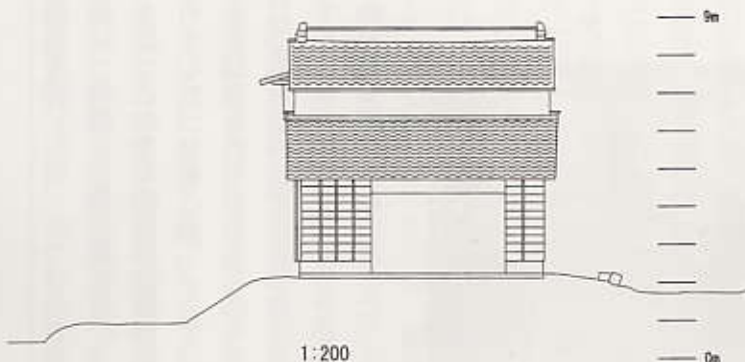
土盛りは東は小笹、北はコンクリート板、西はコンクリート板と生



▲磯山OGさん宅水塚位置図(図中の数字は標高)



▲OGさん宅水塚側面図



▲OGさん宅水塚正面図

垣、南は生垣によって土留めがされています。

倉は桁行3間、梁間2間で、一間幅の底、1.5間幅の孫庇が取り付けられています。側面図を見ると、倉2階の明り取りの窓下にさらに小窓があったり、倉入口がシャッターになっていたり、一部改造がなされています。外装は1階が板張り、2階が漆喰塗りとなっています。

なお、倉の内部については次回ご報告します。



▲OGさん宅水塚



## 十六島新田の成り立ち 1

十六島新田の成り立ちについては、準備号で簡単に説明しましたが、水塚を造ったこの村々がどのように成り立ったのか、ここでもう少し詳しく見ておきたいと思います。

昔、この地域が香取海と呼ばれる内海であったことはすでに述べました。和銅六(七二二)年、朝廷に提出したとされる常陸国風土記には、行方郡は「東・南・西はともに流海」とあります。また、板来(潮来)については、その海に塩を焼く藻やはまぐりなどの貝が多くとれること、南の海に周田三・四里ほどの洲があつて、春には香島(鹿島)・行方二郡の人々は皆貝拾いをする、と記されています。

また、万葉集などには柿本人麻呂らが香取海を詠んだ歌が残されていますが、鎌倉時代の康元元(一一五八)年、実際に鹿島社詣をした藤原光俊は、鹿島社を発つて香取社に渡ろうとした時、「浪荒き香取の海の夕潮に渡りかねたる世を嘆くかな」と詠んでいます。

その後、常陸国風土記に記された

洲は「沖之島」と呼ばれ、常陸・下総のどちらにも属さない地としてわずかな田が作られていたようです。このような田は、「香取文書」の中の鎌倉時代末期文保年間から室町時代後期文龜年間(一一三七～一五〇三)の古文書に、「田ほまち」または「ほんまち」と記載されています。ほまちは外持ち(ほかもち)のことで、年貢の対象になっていない田という意味です。また、至徳二(一二八五)年の香取文書にはラシスナ(押砂)・マカフチ(曲淵)・ケツサ(結佐)といった後の十六島新田に属する地名が現れています。

豊臣秀吉によって北条氏が滅ぼされると、慶長十八(一五九〇)年徳川家康が関東に移封され、下総国も家康の領土となります。この時、常陸国の佐竹氏は健在で、両者は香取の海をはさんで対立状態に入りました。家康の関東入府と同じ年、小見川にいた代官吉田佐太郎は沖之島を巡視し、佐竹氏によって所領を奪われた旧江戸崎城主土岐氏の家臣団をこの地に入植させました。

おきの島北はす新田の儀 何程なりともせいを入 ひらかせ可申候御年貢の儀御定のことく 三ヶ年に相定申候 仍如件  
 とらの三月十八日

吉 佐 印

石田駿河守殿

このような古文書が十六島の一つである三島の山来家文書の中にあります。現代語訳すると、沖之島の北はすの新田のことは、一所懸命開墾しなさい。年貢は昔から決まっているように3年間は無税である、という意味です。(以下、次号)

### 「フィールドミュージアム 現地ワーク」行われる

千葉県教育委員会から委嘱を受けて設置された千葉フィールドミュージアム事業推進委員会は、住民と博物館の連携によるフィールドミュージアムの展開について検討を行ってきましたが、このほど大利根分館で実施されている川のフィールドミュージアム活動の視察を行いました。3月1日(日)、水塚調査の概

要説明を聞いた後、さつば舟で実地に向い、実際に水塚を見たり、十二橋を巡ってかつての水郷の雰囲気を感じました。分館に戻ってからは、①水塚調査をさらにおもしろくするには②水塚以外にどのようなフィールドミュージアムが展開できるかなどの意見交換が行われました。



▲現地ワーク



● 編集後記

水塚調査の初年度記録がようやくできました。隊員の皆さんの熱心な調査と地元の方々のご協力で1年目としては多大な成果があげられました。来年度もどうかよろしくお願いたします。(西)